

スッタニパータに見る仏陀の説法

『ダニヤ』の章

原 豊 寿

はじめに

「仏教の開祖であるゴータマブツダ（釈尊）を歴史的人物として把握するとき、その生き生きとした姿に最も近く迫りうる書——少なくともそのうちの一つ——は『スッタニパータ』であると言っても過言ではないであろう」

中村 元 岩波文庫「ブツダのことば」より

現代の仏教徒にとってブツダその人はあまりにも遠い存在であることは否めない。それはインド、クシナガラでブツダが涅槃に入られて以後の、仏教徒の悶えでもある。「如是我聞……」と始まる諸経典の最初の文からして、伝聞の形式を示しており、以降の文章が果たして本当にブツダの肉声であるのか否か、確かめようもない。しかし、ブツダその人は確かに約二千五百年前のインドに八十年の生涯を送った人であることは、様々な証拠からも真実である。更に、たとえ伝聞であろうともその生涯を賭けた教誡に感動した人々は東アジア全域に広がる。そういう筆者自身、ブツダへの憧憬は焦がれるものを覚える。実際、インドに二度足を運んだ。だが、やはりブツダは遠い。遠

いが、二千五百年前とさほどは変わらないと言う仏跡の風景を目の当たりにした時の思い。「ブッダもこのガンジスに沈む夕日や、ブッダガヤの平原と叢林とを見ていたのだ」という思いが、ブッダは遠い人ではあるが、少しでも近づこうとする努力があながち無駄ではないことを予感させた。そうして浅学ながら、初期経典を渉猟するうちにこの拙論の対象である「スッタニパータ」に出会った。現代に残された経典中、「阿含経」の一部とこの「スッタニパータ」が、迎れる最古の経典に相当することは間違いないかろうと思われる。

この拙論は、「スッタニパータ」中、特に対話の形式で述べられている章を取り挙げその背景を考究し、ブッダの説法の真意に迫ろうとしたものである。

「いかに高尚な教理体系といえども、必ずや歴史現実の中の生活事実に根ざして発生したものだ。」という宮坂院長の「仏教の起源」の言葉を手掛かりに、ここでは登場人物の生活的背景、社会の諸問題、経済、習慣などのできるかぎりの資料を参照しながら、論を進めていきたいと思う。

また、恥じ入る事ことながら、パーリー語やサンスクリットについての知識が皆無のために、この論の基本的テキストとして、中村元博士訳の岩波文庫「ブッダのことば」。並びに渡辺照宏博士訳の河出書房刊「世界の大思想・スッタニパータ」を使用した事をおことわりしておく。

【第一章その二「ダニヤ」十八〜三四】

十八 牛飼いだニヤがいった、

「わたしはもう飯を炊き、乳を搾ってしまった。マヒー河の岸のほとりに、わたしは（妻子と）ともに住んでいます。わが小屋の屋根は葺かれ、火は点されている。神よ雨を降らせようと望むなら、雨を降らせよ。」

十九 師は答えた、

「わたしは怒ることなく、心の煩迷さを離れている。マヒー河の岸のほとりに一夜の宿りをなす。わが小舎（すなわち自身）はあばかれ（欲情の）火は消えた。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二十 牛飼いだニヤがいった、

「蚊も虻もいないし、牛どもは沼地に茂った草を食んで歩み、雨が降ってきても、かれらは耐え忍ぶであろう。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二一 師は答えた、

「我が筏はすでに組まれて、よくつくられていたが、激流を克服して、すでに渡り終り、彼岸に到着している。もはや筏の必要はない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二二 牛飼いだニヤがいった、

「わが牧婦（妻）は従順であり、貪ることがない。久しくともに住んできたが、我が心に適っている。彼女にかなる悪のあるのも聞いたことがない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二三 師は答えた、

「我が心は柔順であり、解脱している。長いあいだ修養したので、よくととのえられている。私にはいかなる悪も存在しない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二四 牛飼いだニヤがいった、

「私は自活しみずから養うものである。わが子らはみなともに住んで健やかである。かれらにいかなる悪のあるのをも聞いたことがない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二五 師は答えた、

「わたしは何びとの傭い人でもない。みずから得たものによって全世界を歩む。他人に傭われる必要はない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二六 牛飼いだニヤがいった、

「未だ馴らされていない牛もいるし、乳を飲む子牛もいる。孕んだ牝牛もいるし、交尾をよくする牝牛もいる。牝牛どもの主である牝牛もいる。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二七 師は答えた、

「未だ馴らされていない牛もいないし、乳を飲む子牛もいない。孕んだ牝牛もいないし、交尾を欲する牝牛もない。牝牛どもの主である牝牛もここにはいない。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二八 牛飼いだニヤがいった、

「牛を繋ぐ杭は、しっかり打ち込まれていて揺るがない。ムンジャ草でつくった新しい縄はよくなわれている。子牛もこれを断つことができないであろう。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

二九 師は答えた、

「牝牛のように結縛を断ち、くさい臭いのする蔓草を象のように踏みにじり、わたくしはもはや母体に入ることはないであろう。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

三〇 忽ちに大雲が現われて、雨を降らし、低地と丘とをみたした。神が雨を降らすのを聞いて、だニヤは次のことを語った。

三一 「われらは尊き師にお目にかかりましたが、われらの得たところは実に大きいのです。眼ある方よ。われらはあなたに帰依いたします。あなたはわれらの師となってください。大いなる聖者よ。」

三二 妻もわたしもともに柔順であります。幸せな人（ブッダ）のもとで清らかな修行を行ないましょう。生死の彼

岸に達して、苦しみを滅ぼしましょう。」

三三 悪魔パービマンがいった。

「子のある者は子について喜び、また牛のある者は牛について喜ぶ。人間の執著するものものは喜びである。執著するものものない人は、実に喜ぶことがない。」

三四 「子のある者は子について憂い、また牛のある者は牛について憂う。実に人間の憂いは執著するものものである。執著するものものない人は、憂うことがない。」

この章の背景となるものについて

先ずダニヤとは誰かについて考察しよう。ブッダの生きた時代を知ろうとすると、その解明はいろいろの示唆を我々に与えてくれるに違いない。

ダニヤとは中村博士の「ブッダのことば」の注釈にもあるように、固有名詞というよりは「信者」という意味の、普通名詞の性格の色濃い言葉である。このことから「ダニヤ」は実名ではなく、後代に充てた仮名であることが推量される。また、ダニヤという言葉が普通名詞「信者」を意味する事から次のような事が考えられるのではないか。すなわち、この章のようなブッダの説法場面が当時多く見られ、その典型として表わされたのが、この章ではないかという事である。ここに見られる対話には、それほど典型的な紀元前五世紀頃のインドの牧畜の民の考え方と価値観が示されているように思われる。

では、その牧畜の民とは一体どのような人々であったのか見てみよう。

先ず、スッタニパータに登場するダニヤの属性であるが、インドーアーリヤ人と見てよきそうである。何故なら、この時代、先住民であるドラビダ系の種族民の人々の農業生産の方法は牧畜を主とするよりは、採集と若干の焼き畑農業によっており、驚く事に現在でも地方によってはこのような生産様式が残っている。もっとも、インドにおいてはそのような古代の残存は驚くに値しないが。このような古代の残存は、逆に古代インドからの土地の肥沃さによるところが大きいようである。現代のインドの大地のイメージは荒涼とした赤茶けたものになり果てているが、それはこの二千年ほどの間に急激に進んだ森林伐採と、イギリスの綿花政策によるところらしい。綿花の栽培はそれほどに耕地を痩せさせるのである。

インドーアーリヤ人の移動の様子を見てみよう。

紀元前千五百年頃、既に衰微していたインダス文明の後に、アーリヤ人たちはヒンドゥクシュ山脈を越えて、北インドに移動していたと考えられる。目的は放牧地の確保であった。多分、彼等の本来の土地の牧草に問題が生じたためと考えられている。先住民との衝突は当然考えられるが、彼等は馬と牛を使う新しい戦略によって、容易に移動の目的を果たしたと考えられる。しかし、ここで注意を要するのは、彼等が先住民と大規模な戦闘を繰り返して、自分たちの支配下におきながら、移動したチングスハンのような征服主義にもとづいてインドに侵入したわけではないということである。何故なら、先住民の生産様式と、彼等のそれとは同じ土地を必要とするような性質のものではなかったからである。それは前記にもよるとおり、先住民たちの生産に適する土地はジャングルの近隣であり、アーリヤ人たちのそれは広い草原地帯であることによる。ただこの時代、鉄の普及によって鋤耕作がひろまり始めており、アーリヤ人たちの生産様式に変化が始まっていたことは重要なことである。それまでの主に牛を中心とした移動性の

牧畜から、定住性のある農耕生産への変化が始まったのである。そして、そのアーリア人たちにとっての新しい農業の舞台となったのが、肥沃なガンジス河流域であった。さらにこの時代変化は、小都市の誕生と小国家群立という波動を産みだしていくことになる。

世界の古代文明を概観するとき、一つの法則のように登場してくる現象がある。それは定住性と小都市の誕生である。エジプト文明、黄河文明、メソポタミア文明などどれをとってもその歴史の初層には、同じ現象が現われた。インドもまた同様である。ただし、インドの古代文明であるインダス文明は、ブッダの時代には完膚無きまでに破壊されその時代の現代インドへの影響は微小なものに留まっていたようである。したがって、ブッダの時代のインドにおける新しい社会変化は、アーリア人の移動と農耕生活への変化、それに伴うインド経済の拡大によってもたらされた、現代へ直通する歴史変化であったということが出来る。その証拠にブッダの時代に萌芽した都市の多くが現代でもガンジス流域の都市として機能している。ペナレスしかり、パトナしかりである。

さらに、経済の拡大は当時のインド社会に商業主義の発展という新しい要素を生んだ。インドにおける貨幣の登場は紀元前七百年頃とされる。以後、ガンジスの水路を中心に貨幣経済が発展し、大いなる富の蓄積とともに、物質的な豊かさを享受するバイシャの時代がやって来ることになる。そのことは従来の祭司権と政治権を牛耳っていたバラモンとクシャトリア階級の社会支配に重大な変化をもたらすこととなる。思想的にはそれまでの「ウパニシャッド」の正統バラモン思想（ブラフマニズム）に対し、非正統バラモン思想家たちが台頭してくることになる。ブッダもその非正統バラモン思想家の一人として、このようなインド社会の大きな変化の内に現われる。

さて、ダニヤである。このようなインド社会の商業主義の発展過程にあって、ダニヤは依然として牧畜の民であり、伝統的な価値観の信奉者である。具体的には、「家族と子孫の繁栄を願い、ヴェーダにもとづく祭祀儀礼を実践

し、神々への供儀を捧げ、それらの行為によって六道の最上位への転生あるいは不死を願う」という価値観の持ち主である。そして、その背景にはバラモンによって広められたブラフマニズムの宗教観がある。その宗教観とは借財と返済という考え方である。ブラフマニズムの宗教観によれば、人間は生来聖賢リン、および神と先祖霊に対し借財を負っており、人生はその返済に費やされるべきものであるとされる。完済したものは死後の良き転生が約束される。それがためにこの時代のインドの民はヴェーダの専門家であるバラモンの言葉に忠実に祭式を執行し、神々に供儀を捧げ、子孫を先祖への義務として守った。スッタニパータ中のダニヤの章のダニヤの言葉にはそのような彼の価値観、あるいは人生観といったものがよく見えている。彼の喜びの対象は柔順な妻であり、健康で善良な子供達であり、財産である牛の健全さである。彼は幸福なことにその全てを手に入れている。ただし、彼はまた揺れ動き始めた階級バイシャに属する者であった。

ブッダはそのように幸福なダニヤの前に、出家をしたもの、即ち大事にしなければならぬ家を捨てた者として登場してくる。更にブッダは従来生まれによるバラモンの存在を否定し、正しい行為によるバラモンの存在価値を標榜する遍歴修行者である。その遍歴の様子は、第十九の「マヒー河の岸のほとりに一夜の宿りをなす」という表現によく表われているであろう。更にブッダは、既にその時点では捨てていたであろうが苦行主義に身を置いた者であり、禁欲主義者である。体制的には反体制的な思想の持ち主であったであろう。このようなブッダの時代によくブッダと比較される人物にジャイナ教の祖マハーヴィーラがいる。彼の教えは仏教とは比較にならないほどより徹底した苦行・禁欲主義であったことが知られる。

ダニヤの章におけるブッダとダニヤの対話の対比性はこのような当時の時代状況、思想背景から生まれてきたものであることが、以上の考察から理解できよう。更に第三十三と三十四の悪魔パーピマンとブッダの対話は現実を生き

ねばならない人間にとって重要な、しかし相矛盾する二つの真理を見事に表現しているというほかない。方や「子のある者は子について喜び」と言い、方や「子のある者は子について憂い」と言う。方や「人間の執著するものものは喜びであり」と言い、方や「実に人間の憂いは執著するものものである」と言う。これから述べていく後の章におけるブッダの言葉に、このようなプラフマニズムの思想に潜む誤謬に対する指摘が多く提出されるが、その所以は以上述べたことによるのである。また、仏教の基本的な現世に対する視点を苦観というが、この第三十三と三十四はそのブッダの目の位置をよく表わしているとも言える。

我々の時代との照応

明治維新を境に日本は欧化主義、および富国強兵・殖産興業の帝国主義的傾向に国家戦略を転じた。そのことは第二次世界大戦終結時まで継続される。しかし、国の方策はそうであったとしても、国民の側は未だ江戸期の封建的な習慣と考え方を色濃く残しつつ、近代への適応を模索していたと言って良いであろう。また、その産業形態の中心は依然農業であり、農村は旧来のコミュニティとモラルを維持しつつ、大家族性を保っていた。軍需にもとづく、機械、船舶などを中心とする重工業の発展は急速な進展を見せつつも、日本全体を覆い尽くすという程には至ってはいなかった。第一その産業構造は国家の保護と統制のもとで育成されており、国民はその恩恵を受けるといふよりは、むしろ犠牲に準ずるところに置かれていた。東北出身者の多くによって起こった五・一五、二・二六事件などの背景には、表面の華々しい国家発展の裏側に潜む国民の貧困が浮き彫りにされている。

さて、戦後、欧化主義は米化主義に転じ、資本主義の構造は更に進化した。国の工業化政策は全体的なものに浸透

し、農村は崩壊の一途をたどった。過疎化である。家族は大家族から、核家族へと変化し、それまでの人と人、家族と家族、地域と地域を結んでいたコミュニティとモラルは崩れ、国民一人一人は豊かさを享受しつつも、孤独化した状況が社会の諸相に現われた。

宗教に目を転じれば、戦後、雨後の筍のごとく登場した多くの新興宗教に示された社会現象はそのような日本人の心の動揺をよく表わしていると思われる。伝統宗教は、そのような社会の変化の中で、農地解放によりその経済的基盤を失い、まずはその基盤をいかに確保するかに中心的課題があり、檀信徒の心の問題に介入する力を喪失していたといつてよいであろう。このような状況は、現象としては多くの相違を含むものの、ブッダの時代のインドの大きな社会変化に比することが可能であろう。前章でも述べたように、ブッダの時代のインドは大きな社会変化の只中であり、人々の心の中にはブラフマニズムに替わる新しい価値観と行き方への欲求が生じていた。それはガンジス流域に広まっていた商業主義、つまりは物質的なものの拡大に端を発する変化であつたらう。また、その欲求の発現の中心はバイシャ階級であり、ダニヤもまた牧畜従事者という職業からして、先にも述べたがその階級の者であつたに相違ない。戦後の日本の物質的なものの拡大と、価値観、およびモラルの変化と対称をなすことのように思われる。またこのような変化は、産業革命以降のヨーロッパにも見ることができようが、ここでは中心的課題を外れるので詳述を避ける。

我々の時代は物質的な豊かさを求めてやまない時代であるといつて差し支えないであろう。経済成長率の数字がそれを如実に物語っている。それはブッダの時代のインドでも変わらない。悪魔パーピマンの言う欲求充足による「歓喜」の価値観に振り子の重しの振れた時代である。しかし、ブッダは深い思慮と観察によつて、その誤謬を見抜く。物を欲しがるからこそ苦しみが生じ、歓喜するからこそ更なる歓喜を求めて永遠の苦悩の輪廻が生ずると。ブッダの

目には、ブラフマニズムという宗教が言うところの人間の「歓喜」に対する一面の真理だけでは語れない人間の二面性、あるいは複雑さがよく見えていたのであろう。観念ではなく、現実の人間の有り様を凝視するところから生まれる仏教の考察と説法の姿をよく理解させてくれるこの「ダニヤ」の章である。

つづく

「参考文献」

- * 「ブッダのことば」 中村 元 訳 岩波文庫
- * 「スッタニパータ」 渡辺照宏 訳 河出書房
- * 「世界の歴史」 塚本善隆 著 中公文庫
- * 「釈尊との対話」 奈良康明 著 NHKブックス
- * 「ジャンカラ」 湯田 豊 著 北樹出版
- * 「インド古代史」 コーサンビー 岩波書店
- * 「仏教の起源」 宮坂有勝 山喜房仏書林
- * 「ヴェーダ学論集」 辻 直四郎 岩波書店
- * 「インド史」 ロミラ・ターバル みすず書房
- * 「初期仏教の思想」 三枝 充 東洋哲学研究所